『比較論理学研究』第 4 号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書 (2006)

認識手段・認識結果の非別体性
プラジュニャーカラグプタのPV III 319解釈

小林　久泰

0. 問題の所在

広くインド認識論では，認識を成立させる要素として，認識主体（pramātṛ），認識対象（prameya），認識手段（pramāṇa），認識結果（pramiti）という四つを挙げる。これに対して，無我説にたち，アートマンの存在を容認しない仏教論理学派は，上述のうち，認識主体を除く後者三つだけを問題とする。仏教論理学派の分析の中で，特に注目すべきは，他学派が個別的な要素と考える認識手段と認識結果を同一なものとみなす点である[1]。ところで，我々は通常，行為とその行為を成立させる要素とはそれぞれ別個なものであると考える。例えば，「斧によって薪が割られる」という場合，切断行為とその切断行為を成立させる要素である斧はそれぞれ異なるものとして考えている。では，どうして，仏教論理学派が言うように，認識の場合，行為（対象理解という認識結果）と行為実現要素（対象理解を成立させる認識手段）が同一なものであり得るのか。

仏教論理学派の基本的立場では，勝義的真理と世俗的真理の区別によって認識手段と認識結果の非別体性が説明される。彼らは，「認識手段である」とか「認識結果である」という理解は，単一な知に関して概念的に構想されたもの，すなわち世俗的なものに過ぎないと考えるのである。

ところで，ダルマキールティは，単一な知であっても，認識手段・認識結果というようにそれぞれ別個なものとみなし得ると述べた後，次のように述べる。

> PV III 319: evaṃprakārā sarvaiva kriyākārakasaṃsthitiḥ / bhāveṣu bhinnābhimateṣv[2] apy āropeṇa[3] vṛttitaḥ[4] //
> 戸崎 [1979: 411]：「すべて行為・行為要素の確定はまさにこのようなものである（＝実有にもとづくものではなく，分別の所産である）。なぜならば，（相互に）相違すると認められるもの（たとえば切断と斧）についてさえ，（その相違は）増益によってあるのであるから」
> Dunne [2004: 271]: “Such is the case for any establishment of action and causal factors because even when the real things construed as the instrument and such are considered to be different, the establishment of them as instrument and such occurs through imputation (*āropa*).”

ここで挙げた戸崎氏および Dunne 氏の翻訳は，主にデーヴェーンドラブッディとマノーラタナンディンの解釈に従ったものと思われる。しかしながら，プラジュニャーカラグプタに従った場合，上述の偈には全く違った解釈を与えることができる。

本稿は，仏教論理学派による認識手段と認識結果の非別体性をめぐる議論の一端を解明するとともに，先行研究者たちがこれまで取り上げて来なかったプラジュニャーカラグプタの議論を検討することで，上述の『プラマーナ・ヴァー

[1] Katsura [1984: 220–221] 参照。

[2] bhāveṣu bhinnā- M; bhāve hy abhinnā- S, PV, bhāvasya bhinnā- PVV. 戸崎 [1979; 411–412, fn. 52] を参照されたい。

[3] apy āropeṇa S; adhyāropeṇa M.

[4] āropeṇa vṛttitaḥ PV, S, sgro ’dogs pas ni ’jug phyir ro T; āropaṇavṛttitaḥ TR.

ルティカ』知覚章第319偈に関して新たな解釈の可能性を提示することを目的とする。

1. 認識手段と認識結果は同一である

プラジュニャーカラグプタの議論の検討に入る前に，議論の背景を押さえるため，ディグナーガ，ダルマキールティによる議論について簡単に触れておく。

ディグナーガは認識手段・認識結果の非別体性を次のように論じている。

> PS(V) I 8cd (Steinkellner [2005: 3,22–4,1]): **savyāpārapratītatvāt pramāṇaṃ phalam eva sat //8//**
>
> na hy atra bāhyakānām iva pramāṇād arthāntaraṃ phalam. tasyaiva tu phalabhūtasya jñānasya viṣayākāratayā utpattyā savyāpārapratītiḥ. tām upādāya pramāṇatvam upacaryate . . .
>
> 「[認識は認識] 結果に他ならないにもかかわらず，作用を持つと認められるから，[その認識が] 認識手段 [と比喩的に表現される]」(PS I 8cd)
>
> ここ [仏教論理学派の見解] では，他学派の者たちが言うように，認識手段と異なるものが [認識] 結果であるのではない。しかし，その [認識] 結果であるところの認識は，対象の形象を持つものとして生じるから，作用を持つと理解される。その [理解] に基づいて，[認識結果であるところの認識が] 認識手段であると比喩的に表現される[5]。

ディグナーガによれば，認識結果である青知は，本来作用を持たないにもかかわらず，青を把握する作用を持っていると理解されるから，「認識手段である」と比喩的に表現される。つまり，認識結果そのものが認識手段として呼ばれているに過ぎないと考える。そして，認識結果がその作用を持つことを理解するための根拠として，その認識結果が「対象の形象を持つこと」(viṣayākāratā) を挙げている。

ダルマキールティは，上述のディグナーガの議論を踏まえた上で，認識結果を「成立させるもの」(sādhana) は何かという観点から，認識手段を論じ[6]，その認識手段が認識結果と別個なものではないことを証明しようと試みる。ダルマキールティによれば，ここでいう「成立させるもの」とは「対象との同一形象性」(meyarūpatā)，つまり，その青知が黄の形象ではなく青の形象を持つことである[7]。ダルマキールティは，ディグナーガが認識結果に対象把握作用があることを理解するための根拠とした「対象の形象を持つこと」それ自体を認識手段とみなしているのである[8]。

ダルモーッタラによれば，ここでダルマキールティがいう「対象との同一形象性」とは，「形象」(ākāra)，「顕現」(ābhāsa) とも呼ばれるものである[9]。無論，青知を青知として成立させるものが，認識が持つ青の形象に他ならないということを考えれば，「同一形象性」を「形象」そのものとみなすことも可能であろう。そして，その青の形象が認識結果である青知と別体ではないということも有形象知識論にたつ仏教論理学派にとっては当然のことと言える。

---

[5] Hattori [1968: 97–98, n. 1.55] 参照。なおジネーンドラブッディは，認識が「認識手段である」と言われることだけでなく，「認識結果である」と言われるのも，比喩的な表現によってそう呼ばれると説明する。PSṬ65,14–66,1: jñānasyādhigamarūpatvāt sādhyatvapratītir iti phalatvam upacaryate / tasyaiva ca viṣayākāraparigrahāt savyāpārapratītir iti pramāṇatvam upacaryate, vyavahriyata ity arthaḥ /

[6] 「行為の実現に対して最も有効なものが行為手段と呼ばれる」(A1.4.42: sādhakatamaṃ karaṇam) というパーニニの規定がこのダルマキールティの議論の背景にあることは言うまでもない。

[7] PV III 306: tasmāt prameyādhigateḥ sādhanaṃ meyarūpatā / sādhane 'nyatra tatkarmasambandho na prasidhyati //; NB I 20: arthasārūpyam asya pramāṇam. 実際にダルマキールティが論じる内容は，もう少し複雑であるが，そこには立ち入らない。詳細については，沖 [1993]，戸崎 [1979: 394–413] を参照されたい。

[8] 戸崎氏は，次のようにディグナーガとダルマキールティの見解の相違を提示する。

戸崎 [1979: 395,20–396,3]：「換言すれば，[陳那の説は] 量果である対象知と対象認識作用としての量との非別体説であった。これに対して法称の説は，量果である対象知とその知を成就せしめるものとしての量との非別体説である。つまり陳那と法称の説の相違は，量 (pramāṇa) の意味の取り方の相違である。陳那はそれを対象認識の作用 (vyāpāra) と取り，法称は対象知 (量果) を成就せしめるもの (sādhana) と取る」([] 筆者補い)

しかし，この戸崎氏の分析は正確ではない。すなわち，ディグナーガは，対象把握作用を持つ認識結果それ自体が，認識手段と呼び得るとしているのであって，作用そのものを認識手段とはみなしてはいないのである。

[9] NBṬ 81,4–5 on NB I 20: tac ca sārūpyaṃ sādṛśyam ākāra ity ābhāsa ity api vyapadiśyate / 沖 [1993: 126–127] 参照。

2. 勝義と世俗の階梯

以上のように，仏教論理学派は単一な知を認識手段であり，認識結果であると考える。しかし，「斧によって薪が割られる」と言われるように，行為とその行為を成立させる要素はそれぞれ異なると我々は通常考えている。仏教論理学派のように，単一な知を認識手段であり，かつ認識結果であるとみなすならば，それぞれ別個なものであるはずの行為と行為実現要素を同一なものとみなしていることになる。どうして，そのようなことが可能なのか。この問題に関してダルマキールティは次のように述べている。

> PV III 318: kriyākaraṇayor aikyavirodha iti ced asat / dharmabhedābhyupagamād vastv abhinnam itīṣyate //
> もしも［対論者が］行為（＝認識結果）と行為手段（＝認識手段）との二つが同一であるのは矛盾である，というならば，［その批判は］正しくない。何故なら，［日常世間では，］属性の差異が承認されるから。［しかし勝義には］実在するもの（vastu）は差異を持たないもの（abhinna）であると認められる。

ダルマキールティは，単一なものに対して，行為（kriyā）と行為手段（karaṇa）というそれぞれ別個なものを想定することができるのは，「属性の差異が承認されるから」（dharmabhedābhyupagamāt）であるとする。ジャヤンタは次のように説明する。

> J (D121b2-4; P138a2-4): byas pa dang mi rtag pa nyid bzhin du ldog pa'i dbye bas brtags pa'i chos kyi dbye ba las bsgrub bya dang sgrub pa'i tha dad pa yin te / dngos po la dbye ba med kyang ngo zhes bstan pa ni / **chos tha dad pa khas len phyir // (PV III 318c)** zhes bya ba ste /
> 所作性と無常性と同じように，ものに差異がないとしても，排除の違いによって構想された属性の差異によって，実現対象と実現手段は異なる，いうことを説明するのが，『何故なら，属性の差異が承認されるから』［云々］である。

例えば，壺には所作性と無常性という異なる属性がある。しかし，だからといって，所作性を持つ壺と無常性を持つ壺は別個なものではない。基体の差異は属性の差異によって決定されるのではなく，「矛盾した属性が基体にあること」（viruddhadharmādhyāsa）によって決定されるのである[10]。

ジャヤンタが言うように，仏教論理学派は「属性の差異」が「排除の違いによって構想された」ものであると考える[11]。マノーラタナンディンは次のように説明する。

> PVV 214,12–14: **dharmabhedasya** vyāvṛttyupakalpitasy**ābhyupagamāt** / anākāravyāvṛttiḥ pramāṇam / anadhigativyāvṛttiś ca phalam iti nānayor aikyam /
> 何故なら，排除によって構想された属性の差異が承認されるから。形象でないものの排除が認識手段（＝形象）である。そして［対象］理解でないものの排除が認識結果（＝対象理解）である。従って，これら二者の間に同一性はない[12]。

マノーラタナンディンによれば，Aとは非Aの排除に他ならないという伝統的な仏教論理学派のアポーハ論がここで意図されている。すなわち，単一なものに関しても，形象ではないものの排除が意図される場合には，「認識手段である」という理解が起こり，他方，対象理解でないものの排除が意図される場合には「認識結果である」という理解が起こる。従って，単一なものを認識手段と認識結果というように別個なものとして理解することには矛盾はないというのである。

ところで，この偈を注釈する際に，プラジュニャーカラグプタは，勝義の立場・世俗の立場をより具体的に提示する。プラジュニャーカラグプタは，まず，勝義としては行為と行為手段などの行為実現要素（kāraka）は異ならないと主張する。彼は斧を例に次のように述べている。

---

[10] viruddhadharmādhyāsa については，江崎 [2004] を参照されたい。JNA 27,4–5: bauddhaḥ kila [na] dharmāṇāṃ bhedamātreṇa dharmibhedam āha / kiṃ tu virodhena / anyathā kṛtakatvānityatvādīnāṃ api dharmibhedam ācakṣīta /

[11] デーヴェーンドラブッディも，ここでダルマキールティが言う「属性の差異の承認」が排除の違いによって構想されたものであると説明する。PVP (D219a4; P257a2–3): 'dir yang gzhal bya'i ngo bo nyid dang don rtogs pa zhes bya ba'i **chos tha dad pa** gang yin pa de **khas len pa nyid** ni ldog pa'i tha dad pas nye bar btags pa yin no //

[12] ラヴィグプタも，マノーラタナンディンと同様の解釈を提示する。R (D119b6–7; P144b3–4): rnam pa med pa las log pa ni rnam pa dang bcas pa'i shes dang / ma rtogs pa las log pa ni rtogs pa'i ngo bo nyid de dngos po ste / shes pa'i mtshan nyid du tha mi dad par 'dod do //

PVA 348,22–25: yadi paramārthataḥ **kriyākaraṇayor aikyaṃ** na yuktam ity ucyate, tad ayuktam / na hi kārakātmikā kriyā kārakātmatāṃ viruṇaddhi[13] / na hi vyāpāraḥ padārthato vyatiricyate[14] / notpatananipatane paraśuto[15] vyatiricyete[16] / tasyaivāparāparadeśasaṃgisvarūpotpattis[17] tathāvyapadeśavatī /[18] na ca sā svarūpād aparā / na ca[19] svarupeṇa tadaikyaṃ virudhyate /

もしも［対論者が］，勝義として，行為と行為手段が同一であるのは不合理であると言うならば，それは正しくない。何故なら，行為は，もしそれが行為実現要素を本質とするものであるならば，［自己が］行為実現要素と同一であることを否定しないから。というのも，作用（vyāpāra）がもの（padārtha）と異なるということはないからである[20]。振り上げられたり振り下ろされたりする［行為］が斧と異なるということはない。まさにその［斧］が[21]次々と別の場所に結びついたものとして生起することがそのように表現されるのである。しかし，その［生起］[22]は［斧］それ自体とは別なものではない。そして［斧］それ自体とその［生起］が同一であることに矛盾はないのである。

ここでプラジュニャーカラグプタは次のように考えている。すなわち，斧が「振り上げられている」，「振り下ろされている」と言われるのは，斧が次々と別の場所に結びついたものとして生起するからである。連続性を持った行為も瞬間瞬間にものが生起しているに過ぎない。そしてものと生起の間には差異がない。従って，行為と行為実現要素が同一であるということには矛盾はない，と考えているのである[23]。

一方で，プラジュニャーカラグプタは，日常世間では，行為と行為実現要素がそれぞれ異なるということも認められるということを次のように述べる。

PVA 348,25–26: atha vyāvahārikī kriyā virodhinī kārakaikatvena, tad etad iṣyata eva / **dharmabhedābhyupagamāt** / vikalpapariniṣṭhito hi dharmabhedo 'bhyupagamyata eva /[24]

あるいはもしも［対論者が］，日常世間では，行為が行為実現要素と同一であることには矛盾があるとするならば，それは［我々も］まさしく認めるところである。何故なら，属性の差異が承認されるのだから。というのも，分別によって確立された属性の差異がまさに承認されるからである。

勝義として単一なものであっても，世俗の立場では，その単一なものを「行為」，「行為実現要素」というように概念的に区別することも可能である。そしてそれは，属性の差異に基づくのである。

3. あらゆる差異の確定は分別の所産

さて，以上のようにダルマキールティは，単一なものであっても，認識手段・認識結果というようにそれぞれ別個なものとみなし得ると述べた後，冒頭に挙げた第319偈を述べている。先にも指摘したように，この偈は注釈者たちによって，解釈が異なる。とりわけ後半部の解釈に相違が見られる。以下，デーヴェーンドラブッディ，マノーラタナンディンの解釈を検討し，その後プラジュニャーカラグプタの解釈を検討する。

---

[13] viruṇaddhi M; niruṇaddhi S.

[14] vyatiricyate M; bhidyate S.

[15] paraśuto M; parśuto S, paśuto S(a).

[16] vyatiricyete S; (')tiricyete M.

[17] saṃgisvarūpotpattis M.; saṃginy utpattis S.

[18] 以下，PVA 348,17–349,5 におけるプラジュニャーカラグプタの議論は，TR 45*,7–31 に，完全に一致するものではないが，多くのパラレルを見い出すことができる。Cf. TR 45*,14–15: tathā paraśor utpatananipatanavyāpārau nāparāparadeśasaṅgisvarūpotpatter aparau devadattāyattatayā.

[19] M, S(a); ins sā S.

[20] Y (D253a3–4; P340a2–3): gal te byed pa po'i bdag nyid can ni bya ba nyid du (P; om. (du) D) mi 'gyur ba'i ma yin nam / des na ji ltar byed pa po'i bdag nyid du 'gal ba ma yin snyam na / **byed pa ni** zhes gsungs so //（「【反論】行為実現要素によって構成されるものは行為そのものではないだろう。従って，どうして行為実現要素を本質とすることと矛盾しないことがあろうか。【答論】『作用が』［云々］と答える」）

[21] Y (D253a4; P340a3): **de nyid** ces bya ba ni sta re nyid (P; de lta nyid D) do //（「『まさにそれ』とは，まさにその斧，ということである」）

[22] Y (D253a4; P340a3): **de** zhes bya ba ni skyes pa nyid do //（「『それ』とは，まさに生起のことである」）

[23] ニヤーヤ学派バーサルヴァジュニャは，このような刹那滅論を前提とした仏教徒の作用論を否定している。NBhū 50,20–51–25, 山上 [1999: 101–103] を参照されたい。

[24] Cf. TR 45*,15–17: vyavahārikaḥ punaḥ kriyākārakayor bhedo yady abhimataḥ, tadā dharmasya vyāvṛttilakṣaṇasya bhinnasyābhyupagamād asty eva.

3.1. デーヴェーンドラブッディ，マノーラタナンディンの解釈

デーヴェーンドラブッディは，上記の第319偈後半部を次のように注釈する。

> PVP (D219a5–6; P257a3–4): gang du yang dngos po tha dad pa la bya ba dang byed pa rnam par 'jog par 'dod pa ste / dper na sta re la sogs pa lta bu ste / **dngos rnams tha dad 'dod pa la** // der yang dngos po la rten pa can ma yin no // ci'i phyir zhe na / **sgro 'dogs pas ni 'jug phyir ro** //
> ある場合には，異なるものの間に行為と行為実現要素の確定が認められる。例えば，斧などのように。『相違すると考えられるものにおいて』。それら［相違すると考えられるもの］においても，［行為と行為実現要素の確定は］実在に依拠したものではない。何故か。『付託によって起こるのだから』。

ここでは，「相違すると考えられるもの」の具体例として斧が挙げられていることから，切断という行為と斧という行為手段の関係が問題となっていることが分かる。ただし，説明が非常に簡潔であるため，デーヴェーンドラブッディの注釈だけからは，その意図するところを正確に汲み取ることができない。

マノーラタナンディンの注釈を見てみよう。

> PVV 214,22–24: **sarvaiva kriyākārakayoḥ saṃsthitir** vyavasthā **evaṃprakārā** kalpitaiva / **bhinnābhimateṣv api** dāruparaśvādiṣu kriyākaraṇa**bhāvasyāropeṇa vṛttitaḥ** / na hi tatrāpi kāryakāraṇavastudvayavyatiriktā kriyāsti /
> 『まさにすべての行為と行為実現要素の確定(saṃsthiti = vyavasthā)』は，『このようなものである』，すなわち，構想されたものに過ぎない。木片や斧などといった『相違すると考えられるものに関しても』［行為と行為実現要素の確定が］行為や行為手段という『属性の付託によって起こるから』。というのも，それら［相違すると考えられるもの］に関しても，原因や結果である二つの実在物とは別個なものとして行為が存在することはないからである。

まず，断っておかなければならないのは，マノーラタナンディン注では第319偈に異読が見られるということである。すなわち，c句のbhāveṣuをマノーラタナンディンはbhāvasyaと読んでいるようである[25]。そして，マノーラタナンディンは，ここでのbhāvaという語を「属性」と理解し[26]，木片それ自体に関しては，行為という属性を付託することによって，また斧それ自体に関しては，行為手段という属性を付託することによって，木片や斧がそれぞれ行為や行為実現要素として確定される，というようにダルマキールティの偈を解釈するのである。ここでのマノーラタナンディンの解釈のポイントは，単一な知だけではなく，それぞれ相違すると考えられる木片や斧の場合も，属性の付託によって，分断された木片が「切断である」と理解され，斧が「手段である」とそれぞれ理解される，としている点である。

それでは，相違すると考えられる木片や斧に関して，どのように属性の付託が起こるのか。マノーラタナンディンはそのことを次のように説明する。

> PVV 214,24–27: dvidhābhūtaṃ kāṣṭham evātadvyāvṛttyā bhedāntarapratikṣepeṇa chidety ucyate / tatkāraṇeṣu ca puruṣakaraparaśvādiṣu sāmagryāntaravartinaḥ karāc chidāyāḥ anutpatteḥ paraśor asādhāraṇaṃ sahakāritvam upadarśayitum atadvyāvṛttyā karaṇavyapadeśaḥ / na tu kriyākaraṇatvam anyad eva kāryakaraṇābhyām /
> 二つになった木片こそが，それでないものの排除によって，他の差異を無視して，「切断」と呼ばれる。そして，その［二つになった木片］の原因である人間の手や斧などのうち，他の原因集合に属する手からは切断は起こらないので，斧が［切断に］特有な共働因であること示すために，それではないものの排除によって「手段」と呼ばれる。しかしながら，行為という属性が結果［＝二つになった木片］とは全く別個であるとか，行為手段という属性が原因［＝斧］とは全く別個であるということはない。

分断された木片とは別個に「切断」という行為は存在しないが，その木片のうち，「分断さ

[25]但し，この読みがマノーラタナンディンの散文注にあるkriyākaraṇabhāvasyaという語をもとに校訂者であるSānkrityāyanaによって再構築されたものであることに注意する必要がある。マノーラタナンディンが見ていたダルマキールティの偈もbhāveṣuという読みであったという可能性を否定することはできない。しかし，マノーラタナンディンがbhāvasyaと読んでいる可能性も否定できないので，ここでは暫定的にSānkrityāyanaに従って理解した。

[26]戸崎 [1979: 412, fn. 52] は，ここでマノーラタナンディンが用いるbhāvaという語を「関係」と理解するが，文脈上，「属性」(dharma) と理解すべきである。

れていること」という側面だけを取り上げ，切断ではないものの排除によって，我々はその木片そのものを「切断」と呼ぶのである。また，その分断された木片の原因として，人間の手や斧などが考えられるが，それらのうちで斧だけが切断に特有な共働因である。従って，切断に特有な共働因ではないもの，すなわち手段ではないものの排除によって，斧が「手段」と呼ばれるのである。

以上を踏まえた上で，当該の第319偈をマノーラタナンディンの解釈に従って翻訳すれば次のようになる。

PV III 319: evaṃprakārā sarvaiva kriyākārakasaṃsthitiḥ / bhāvasya bhinnābhimateṣv apy āropeṇa vṛttitaḥ //

マノーラタナンディン解釈：「およそあらゆる行為や行為実現要素の確定はこのような［構想されたものに他ならない］。何故なら，［単一な知だけでなく，］相違すると考えられるもの［たとえば木片や斧など］に関しても，［行為や行為手段という］属性（bhāva）の付託によって［「行為である」とか「行為手段である」という確定が］起こるのだから」

3.2. プラジュニャーカラグプタの解釈

以上，デーヴェーンドラブッディ，マノーラタナンディンの解釈を検討してきたが，次に，プラジュニャーカラグプタの解釈を検討しよう。プラジュニャーカラグプタはあらゆる行為と行為実現要素の確定が構想された差異を持つことを，人が差異を確定する過程を提示しつつ，次のように説明する。

PVA 348,28–349,1: anvayavyatirekābhyām ekatvānaikyakalpane[27] / kriyākārakabhedena vyavahāro vyavasthitaḥ //624//

devadattas tāvad eka eva pratyabhijñābalād[28] vyavasthāpyate / tasya sthānagamane pradeśavṛttinī / tatas tatra kriyākārakayor[29] bhedaḥ kalpyate[30] / yo hi yasminn abhinne bhidyate sa tasmād vyatiricyate / paramārthatas tu devadatta evāvasthābhedād vyatirekī bhidyate / tena **bhāveṣu bhinnābhimateṣv api** loka ekatvādhyāropeṇa[31] vartata[32] iti tadanurodhāt kriyākārakayor bhedavyavasthā,[33] na paramārthataḥ /[34]

「肯定的随伴と否定的随伴に基づいて，［行為実現要素が］同一であるとも，［様々な行為が］同一でないとも構想されるとき，行為と行為実現要素の差異［が構想される。そしてその差異］によって，活動が確立される[35]」(624)

まず，再認識によってデーヴァダッタは全く同一人物であると確定される。その同じ［デーヴァダッタ］にとって，立ち止まり行為と進行行為が随時に起こる（pradeśavṛtti）[36]。それから，その［デーヴァダッタ］に行為と行為実現要素の差異が構想される。というのも，Yに差異がない時にXに差異があるならば，XはYと異なるからである。しかし，勝義には，デーヴァダッタ自身が，状態の違いに基づく差異を持つものとして異なるのである。従って，『相違すると思われているものに関しても』，世間の人は，同一性を付託することによって，活動するのである。それに従って，行為と行為実現要素の間に差異が確定される。［しかし，その確定は］勝義にはない。

ここで最も注目すべきは，日常世間では，同一人物であるとみなされているデーヴァダッタが，勝義には，それぞれの瞬間ごとに，全く別な人物とみなされている点である。プラジュ

[27] ekatvānaikya- S; ekatvānaika- M.

[28] pratyabhijñābalād S; pratyabhijñājñānabalād M.

[29] kriyākārakayoḥ M; kriyayor S.

[30] kalpyate M; kalpate S.

[31] ekatvādhyāropeṇa M; ekatvāropeṇa S.

[32] vartata M; pravartata S.

[33] kriyākārakayor bhedavyavasthā M, bya ba byed pa po tha dad pa rnam par gzhag T; kriyākārakavyavasthā S.

[34] Cf. TR 45*,20–29: anvayavyatirekābhyām ekatvānaikyakalpane / kriyākārakabhedena vyavahāro vyavasthitaḥ //

adevadattaparāvṛttyā devadatta ekapratyavamarśaviṣayatvenaikas tāvad vyavasthāpyate. tasya ca tuṣabuṣaprakṣepaprasaṅgapracalatpāṇipallavatālakṣaṇā pākakriyā kādācitkī yadi devadattasvabhāvaḥ syān na yajñadattaḥ pācako bhaved ity evānādivāsanāvaśād anvayavyatirekābhyāṃ bhede kriyādivyavasthitiḥ syāt. tato yasminn abhinne yad bhidyate tat tato vyatiricyate. paramārthas tu devadatta evāparāparapratyayayogād viśiṣṭasvabhāvo vibhāvyate, lokas tv ekatvādhyāropeṇa vartata iti tadanurodhād eva vyavasthā.

[35] J (D121b5; P138a5–6): gcig nyid kyang yin la gcig ma yin pa (D; om. (pa) P) nyid kyang yin pa ste / gcig nyid du ma nyid dag tu brtags pa (em.; pa'i DP) yin na'o //（「同一であるとも，同一でないとも。すなわち，同一であるとも同一でないとも構想される場合」）

[36] pradeśavṛtti という語を直訳すれば，「一部分に起こるもの」と訳せよう。しかし，文脈，および TR に見られる pākakriyā kādācitkī という表現を考慮し，ここでは「随時に起こるもの」の意味で解釈した。注34参照。

ニャーカラグプタによれば，世間の人は，デーヴァダッタが同一人物であるにもかかわらず，彼に様々な行為がある場合，そのデーヴァダッタと行為とがそれぞれ別個なものであると考える。しかしながら，勝義には，世間の人の理解の前提となっている「同じデーヴァダッタ」という判断も，同一性の付託によって構想されたものに過ぎない。何故なら，立ち止まっているデーヴァダッタと進行しているデーヴァダッタは，真実には，それぞれ別な人物だからである。

以上のような観点から，プラジュニャーカラグプタは，ダルマキールティの偈における「相違すると考えられる」(bhinnābhimata) という語によって，勝義として各瞬間ごとに相違すると考えられるデーヴァダッタが意図されていると考えている。このことは，「付託されるもの」としてマノーラタナンディンが「行為や行為手段という属性」を考えるのに対して，プラジュニャーカラグプタは「同一性」を挙げていることからも明らかである。さらに，偈中の'vṛttitaḥ'という語に関しては，「世間の人が活動する［から］」(lokaḥ vartate) という解釈を与えていることが分かる。

4. 結語

以上を踏まえ，プラジュニャーカラグプタの解釈に従った『プラマーナヴァールティカ』知覚章第319偈の訳を提示するならば，次のようになろう。

> PV III 319: evaṃprakārā sarvaiva kriyākārakasaṃsthitiḥ / bhāveṣu bhinnābhimateṣv apy āropeṇa vṛttitaḥ //
>
> プラジュニャーカラグプタ解釈：「およそあらゆる行為や行為実現要素の確定はこのような［構想されたものに他ならない］。何故なら，［勝義には］相違すると考えられるもの［たとえば各瞬間ごとに別人であるデーヴァダッタなど］に関しても，［同一性の］付託によって，［世間の人は］活動し，それに従って［行為と行為実現要素の間に差異が確定されるのである］」

仏教論理学派は，認識手段と認識結果を別体とはみなさない。それらは単一な知に関して概念的に抽出されたものに過ぎないのである。真実には知があるだけであるが，日常世間では，属性の差異を構想することによって，その知が一方では「認識手段」として，他方では「認識結果」として，それぞれ別個なものとして扱われるのである。

マノーラタナンディンは，「斧によって薪が割られる」という場合も，「切断行為である」とか「切断行為の手段である」という確定は，二つになった木片や斧に関して，それぞれ「行為」という属性 (kriyābhāva)，「行為手段」という属性 (karaṇabhāva) が付託されることによって起こる，と考える。すなわち，知という単一なものだけが，属性の付託によって，「認識結果」や「認識手段」とみなされるのではなく，二つになった木片や斧といった相違すると考えられるものもまた，属性の付託によって，「切断行為」や「切断行為の手段」とみなされると解釈する。そしてそれ故，「行為と行為実現要素の確定はすべて構想されたものに過ぎない」と第319偈でダルマキールティが述べているとマノーラタナンディンは解釈する。

これに対して，プラジュニャーカラグプタは異なる解釈を提示している。彼によれば，世間の人々は，真実には別個なものを同一なものと構想し，そして，それを根拠として，真実には同一なものを別個なものと構想する。すなわち，同一であるということも同一でないということも，すべて世間の人々によって構想されたものに過ぎない。だからこそ，ダルマキールティは「行為と行為実現要素の確定はすべて構想されたものに過ぎない」と述べたのだとプラジュニャーカラグプタは考えるのである。

刹那を勝義的なもの，相続を世俗的なものと考える仏教の常識からみれば，このプラジュニャーカラグプタの考え方自体に独自性は見られない。しかし，ここで敢えて世間の人の「差異がある」(bheda) という構想だけを批判するのではなく，「差異がない」(abheda) という構想をも批判するところに，彼のある種中道的立場が看取される。

略号及び参考文献

A　Aṣṭādhyāyī (Pāṇini).

J　Pramāṇavārttikālaṃkāraṭīkā (Jayanta). Tibetan translation. D4222; P5720.

JNA Jñānaśrīmitranibandhāvali, A. Thakur, ed. 2nd edn. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1987.

M Manuscript B of Pramāṇavārttikālaṃkāra: *Sanskrit Manuscripts of Prajñākaragupta's Pramāṇavārttikabhāṣyam.* Shigeaki Watanabe, ed. Patna-Narita, 1998.

NB Nyāyabindu (Dharmakīrti). See NBṬ.

NBhū Nyāyabhūṣaṇa (Bhāsarvajña): Swami Yogindranand, ed. Ṣaddarśanaprakāśana Granthamālā 1, Varanasi: Śaddarśan Prakāśan Pratiṣṭān, 1968.

NBṬ Nyāyabinduṭīkā (Dharmottara): Dalsukhabhai Malvania, ed. *Paṇḍita Durveka Miśra's Dharmottarapradīpa: Being a sub-commentary on Dharmottara's Nyāyabinduṭīkā, a commentary on Dharmakīrti's Nyāyabindu.* Tibetan Sanskrit Works Series 2. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1955.

PV Pramāṇavārttika (Dharmakīrti): Yusho Miyasaka, ed. Pramāṇavārttika-kārikā (Sanskrit and Tibetan). *Acta Indologica* 2 (1971/72): 1–206.

PVA Pramāṇavārttikālaṃkāra (Prajñākaragupta): Rāhula Sāṅkṛtyāyana, ed. Tibetan Sanskrit Works Series 1. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1953.

PVP Pramāṇavārttikapañjikā (Devendrabuddhi). Tibetan translation. D4217; P5717(b).

PVV Pramāṇavārttikavṛtti (Manorathanandin): Rāhula Sāṅkṛtyāyana, ed. Appendix to *Journal of Bihar and Orissa Research Society.* Patna: 1938–40.

PS(V) Pramāṇasamuccaya(-vṛtti) (Dignāga). See Steinkellner [2005].

PSṬ Viśālāmalavatī nāma Pramāṇasamuccayaṭīkā (Jinendrabuddhi): Ernst Steinkellner, Helmut Krasser and Horst Lasic, eds. *Jinendrabuddhi's Pramanasamuccayatika : Chapter 1.* 2 Vols. Vienna: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2005.

R Pramāṇavārttikaṭīkā ad PV III (Ravigupta). Tibetan translation. D 4225; P 5722.

S Rāhula Sāṅkṛtyāyana's edition of Pramāṇavārttikālaṃkāra. See PVA.

S(a) Dharmakīrteḥ Pramāṇavārtikasya Bhāṣyaṃ Vārtikālaṃkāraḥ Prajñākaraguptasya Tripiṭakācāryena Rāhula-Sāṃkṛtyāyanena sampāditaḥ, *Journal of Bihar and Orissa Research Society* 21–2, Patna: 1935.

T Tibetan translation of Pramāṇavārttikālaṃkāra. D4221; P5719.

TR Tarkarahasya. See 矢板 [2005].

Y Pramāṇavārttikālaṃkāraṭīkā Supariśuddhi (Yamāri). Tibetan translation. D4226; P5723.

Dunne, John D.

2004 *Foundations of Dharmakīrti's Philosophy.* Boston: Wisdom Publications.

Hattori, Masaaki

1968 *Dignāga, On Perception, being the Pratyakṣapariccheda of Dignāga's Pramāṇasamuccaya.* Harvard Oriental Series 47, Cambridge.

Katsura, Shoryu

1984 "Dharmakīrti's Theory of Truth," *Journal of Indian Philosophy* 12: 215–235.

Steinkellner, Ernst

2005 *Dignāga's Pramāṇasamuccaya, Chapter I,* www.oeaw.ac.at/ias/Mat/dignaga_PS_1.pdf.

江崎　公児

2004「ダルマキールティによる差異の定義について　'viruddhadharmādhyāsa' とは何か」『比較論理学研究』2: 39–46.

沖　和史

1993「ダルモーッタラの「量量果非別体論」」『渡邊文麿博士追悼記念論集　原始仏教と大乗仏教』所収

桂　紹隆

1969「ダルマキールティにおける「自己認識」の理論」『南都仏教』23: 1–44.

戸崎　宏正

1979『仏教認識論の研究』上巻　大東出版社

矢板　秀臣

2005『仏教知識論の原典研究　瑜伽論因明，ダルモッタラティッパナカ，タルカラハスヤ』成田山新勝寺

山上　證道

1999『ニヤーヤ学派の仏教批判　ニヤーヤブーシャナ知覚章解読研究』平楽寺書店

(こばやし　ひさやす，日本学術振興会)